

参考資料：研究会活動報告など

第1号（2012年3月24日）・第2号（2015年7月31日）は広島大学学術情報リポジトリに掲載されているが、一部割愛されており、本号でデータを補完することとした。

『拓蹊』第1号巻頭言

金子肇

私が曾田先生に初めてお会いしたのは30年以上も前にさかのぼる。学部3年のとき、先生が主催されていた読書会に参加したのが最初である。当時、先生は総合科学部の助手であった。読書会は英語文献を逐語訳する形式で、夏休みの数日間を利用して集中的に行われたのだが、そのハードさに私は自分の発表担当日だけで疲労困憊し、翌日は午後まで寝入って不覚にも読書会をさぼってしまった。その後、先生の読書会には継続して参加するようになったのだが、私にとって有り難かったのは、テキストの内容に絡ませながら、先生が関連する研究動向や中国近代史研究の諸問題について、惜しみなく自分の見解を披歴されることだった。そこでの先生のさりげない示唆が、中国近代史研究のビギナーだった当時の私にとって、ときに研究テーマや論文の視点を探り出す貴重なヒントとなったり、その後何年も解決すべき宿題として頭のなかに残っていく重い提言となったりした。

1982年に発足した〔広島〕中国近代史研究会は、現在までに150回を超える例会を積み重ねてきたが、この間、曾田先生は総合科学部の助手から文学部の助手に転じた後、1983年に下関市立大学へ移られ、1990年から再び広島大学文学部に戻られている。しかし、こうした職場の異動に関係なく、先生は一貫して研究会に出席し指導的な役割を果たしてこられた。思うに、近代史研究会の誇るべきところは、談論風発で互いの研究に対し忌憚なく批判や意見を交わしあうところにある。私や私と同世代の研究会メンバーは、ともすればそうした研究会の雰囲気に乗じて未熟な質問や不躰な批判を先生に吹っかけることがあったが、先生はいつも大らかに受け止め真摯に対応されていた。研究の場であって師弟、長幼の別なく自由闊達に議論しようとする先生の姿勢は、今日に至るまで何ら変わっていない。先生が築き上げたとも言えるこうした研究会の気風を、私たち後進は今後とも守り育てていかなければならないと思う。

近年、曾田先生は明治憲政との関係に着目した清末・民国初年の憲政史研究を手がけられ、その成果を『立憲国家中国への始動』（2009年）として公刊された。先生は、早くから日本近世・近代史研究の成果と方法に強い関心を示してこられた。近年の研究では、その関心が清末・民国初年（明治・大正期）の日中関係を「輪切り」にして構造的に捉えるという独自

の方法に結実したと思われるが、先生は退職後もその方法に基づいて研究のさらなる深化をめざしておられるようだ。その意味で、退職は先生にとって一つの通過点に過ぎず、むしろ新たな出発点と言うに相応しい。本冊子のタイトルを「拓蹊」とした所以も、先生の来し方を振り返りながら新たな門出をお祝いするということにある。また、シンポジウム「20世紀東アジアの立憲制」の記録を取録したのは、このシンポジウムが、先生の著書『立憲国家中国への始動』を議論の中心にすえ、しかも日本史と中国史の交流という先生の問題意識をよく映し出しているからである。そこで、その充実した内容をぜひ記録に留めたいと考えたわけだが、シンポジウムの活発な議論を通して、新たな研究に取り組みつつある先生の姿を少しでも感じ取ってもらえたら幸いである。

さて、私たちも曾田先生に負けてはおられない。研究面で先生の好敵手たりえるよう努力していくことが、先生の新たな門出を祝う最高のプレゼントになるはずだから。先生、ひとまずお疲れさまでした。今後ともお手柔らかにお願いします。

『拓蹊』第1号 編集後記

編集は金子肇さん、丸田孝志さん、そして水羽の3人があたった。タイトルは丸田さんが「桃李不言下自成蹊」から考案した、いくつかの候補から選んだ。本文の写真・カットは金子さん・丸田さん提供のもの。「思い出」の執筆者は紙幅の関係もあり、4名に絞らざるをえなかったが、ご理解いただきたい。「業績一覧」は通常の形ではないが、僕たちの「足跡」も示してみようと試みた。膨大な「足跡」のデータ整理は主として丸田さんによる。

僕と曾田先生の関係は、1980年、本誌で笹川さんや金子さんも触れている McDonald の *The urban origins of rural revolution* (1978) の読書会に参加してから始まった。その最初の日、僕は前日1日で10数頁の準備を終えようとして、当日は中学生レベルの誤読を繰り返す、ひどく酷い報告をしてしまった。しかしそんな僕に対しても、先生は切り捨てるでもなく、過保護にするのでもなく、いつも他の学生と同じように「良いものは良い、悪いものは悪い」という是々非々の態度で対応してくださった。今でも数限りないミスを犯し、その都度、先生には多大な迷惑をかけているが、それでも「次は頑張ろう！」と思えるのは、先生の他者とのつきあい方の絶妙な距離感に起因する。

こうした行動様式は、おそらく新入生へ向けて22歳の先生が書いた言葉——「ある社会・集団の中に入った時、失ってはならないものは「驚愕」という感情です。そしてそれ以上に保持しつづけなければならないのは、「冷徹」な頭脳である」の実践ともいえよう（広島大『東洋史研究室月報』2、1970.6）。だが大学紛争の余燼のなかで発行された『われわれの歴史学』（1974.1）という同人誌を見ると、先生の「冷徹」な活動を支えているものは、その当時から対象に「驚愕」できる感性の鋭さと、（ほとんど表に出されないが）熱い情だった

のだと感じる。先生の最初の著書は、1994年、広島大学文学部移転の年に公刊されている。移転準備は1年以上前から始まり、最終段階では皆が等しく埃だらけで作業をしたが、こうした日々のなかで、先生は最初の著作の公刊準備をしていたのである。2冊目の著作も、文学研究科執行部の一員として多忙を極めるなか、休日返上で準備された。また1982年の広島中国近代史研究会の組織や、その後の研究会の構成員を組織した編書・翻訳書の公刊などから、僕は後進の学生に対する先生の情の深さを感じてきた。先生本人は、自分にとって面白いからやってきたんだ、としか言われないうらうが。

本冊のなかで先生自身も触れられているが、研究会のあとは本当によく議論し遊んだ。「恋愛もできないヤツにろくな研究はできない」というのが先生の言葉だったかどうかは、すでに忘却の彼方だが、午前0時過ぎまで語り明かし、その後、ビリヤードやボーリングに興じて1日を終える、ということもあった。そのまま先生のご自宅に押しかけ、奥さんに迷惑をかけたこともある。

そんなある日、笹川さん・金子さんらとともに、ご自宅で泊まり込みコンパをしたことがあった。先生は子供さんのジャングルジムになりながら、僕らの相手をし深夜まで酒を飲み交わしたにも関わらず、次の日の早朝には、臨月の奥さんに替わり子供さんのお弁当を作っていた。綺麗に彩られたちっちゃなお弁当箱は、いまだに忘れられない。先生からは学問や研究者としての生き方について、さまざまなことを教わった。だが、人としての有り様の基本でも、大きな影響を受けてきた。それは研究会のメンバーに共通する思いだろう。

編集後記を書きながら、先生は「種を蒔く人」であるだけでなく、「耕す人」でもあると改めて感じている。退職されたのちも、どうぞよろしくお願いします。（水羽信男）

『拓蹊』第2号掲載：広島中国近代史研究会例会(2012年6月～2015年5月)

2012年

第152回6月2日

合評会 笹川裕史著『中華人民共和国誕生の社会史』（講談社選書メチエ、2011年）

書評者 荒武達朗（徳島大学） 布川弘（広島大学）

第153回7月14日

土居智則（長崎外国語大学） 清末の非正規財政支出の報告について

—外銷の「作正開銷」を中心として—

坂井田夕起子（大阪大学） 仏教の有用性

—中華人民共和国の外交政策と仏教（1949-1966）—

第154回11月10日

美馬芳江（広島大学文学研究科博士課程後期）

南京国民政府時期における江蘇省の蚕糸業改良—無錫を中心として—
酒井順一郎（長崎外国語大学） 関東大震災に於ける中国人日本留学生界

2013年

第155回 3月27日

吉田豊子（京都産業大学）民族主義と現実主義の狭間で
—1945年の中ソ条約交渉での国民政府のモンゴルへの対応—
小池聖一（広島大学） 日本のアーカイブス、その現状と課題

第156回 10月13日

美馬芳江（広島大学文学研究科博士課程後期）
南京国民政府期、江蘇省における蚕種改良事業の展開
曾田三郎（広島大学名誉教授）日本語史料で描く中華民国初期政治史

第157回 12月14日

橘誠（下関市立大学）モンゴル近現代史研究の現状と課題
飯塚靖（下関市立大学）国共内戦期・中国共産党による東北根拠地での兵器生産

2014年

第158回 3月18日

合評会 曾田三郎著『中華民国の誕生と大正初期の日本人』（思文閣出版、2013年）
書評者：千葉功（学習院大学） 金子肇（広島大学）
コメンテーター：布川弘（広島大学）

第159回 5月31日

林礼釗（大阪大学法学研究科博士課程後期）
書評：水羽信男著『中国の愛国と民主—章乃器とその時代—』（汲古選書、2012年）
三品英憲（和歌山大学）
書評：丸田孝志著『革命の儀礼—中国共産党根拠地の政治動員と民俗—』（汲古書院、2013年）

第160回 11月8日

大澤武司（熊本学園大学）
書評：坂井田夕起子著『誰も知らない『西遊記』—玄奘三蔵の遺骨をめぐる
東アジア戦後史—』（龍溪書舎、2013年）
ハムゴト（広島大学総合研究科博士課程後期）
内モンゴル民族主義運動における内部統一に関して

2015年

第161回 2月14日

班婷（広島大学大学院教育学研究科博士課程後期）
民国初期の小学校—国文科のカリキュラム—

水羽信男（広島大学）討論の広場：思想史研究と基層社会史研究

—奥村哲編『変革期の基層社会』を素材として—

第162回5月23日

清瀬峻（広島大学文学研究科博士課程前期） 佛山精武体育会と区声白

金子肇（広島大学）安福国会と世論の形成—中国銀行則例案をめぐる—

『拓蹊』第2号 編集後記

2012年3月に曾田三郎先生退職記念冊として本誌を刊行して、既に3年が過ぎました。記念冊では、2011年に近代日本研究フォーラム、広島近世近代史研究会、広島中国近代史研究会の共催で行われたシンポジウム「20世紀東アジアの立憲制—辛亥革命と大正政変—」の記録を収録しました。このシンポジウムでは、曾田氏の近代中国の憲政史に関する一冊目の著書、『立憲国家中国への始動：明治憲政と近代中国』（思文閣出版、2009年）を巡っても議論が交わされました。

本号は、曾田氏の憲政史に関する二冊目の著書、『中華民国の誕生と大正初期の日本人』（思文閣出版、2013年）の合評会の記録を収録致しました。憲政を巡る日本の政治情勢が隣国の政治変動にも大きな影響を与え、日本人の対中国認識が日本の政治情勢認識との関係で様々に展開していく状況について、千葉功氏、金子肇氏の書評報告、布川弘氏のコメントを基礎に、日本史研究者を交えて活発な議論が行われました。

議論においても触れられていますが、民意による政治への期待が隣国の「専制的な」政府に対する批判とこれに対抗する「民党」への支援に結び付き、同時にそれが対外拡張への期待にもつながるという大正デモクラシー期の政治と言論の構造は、昭和ファシズムへの道を国際的な視点で検討する上でも重要な問題です。憲政を視点とする外交史や相互認識に関する研究は、今後世界史的な枠組みでの展開が期待できるものと考えます。

また、この時期の歴史の経験と可能性に思いを至すことは、ポピュリズムとナショナリズムが東アジアでぶつかり合い、隣国との関係が憲政に関する議論を絡めながら大きく転換しつつある今日、極めて現実的な意義を孕むものと考えます。

なお、千葉氏には、今回の報告を基に改めて『史学研究』第287号（2015年）に書評を執筆して頂きました。曾田氏同著の書評には、この他、武藤秀太郎『社会思想史研究：社会思想史学会年報』第38号（2014年）、松下佐知子『東アジア近代史』第17号（2014年）があります。合わせ、ご参照下さい。

飯塚靖氏からは、日中戦争後、中国に留用された二人の日本人の回想記をご提供頂きました。戦後中国の建設に様々な形で携わった日本人の事跡は、敗戦を境に「断絶」として捉えられがちな日中関係史に新たな視点を提供するものです。文字通り生死の一線を越えた究

極の状況の中で、お二人がどのような体験をし何を考えて生きてこられたか、当事者だけしか語りえない迫真の筆致で描かれています。日本人のアジア体験の記憶は、国民の記憶としての継承が充分になされないまま、数世代を経ようとしています。その意味でも貴重な記録をご提供頂いたことに感謝申し上げます。

ナショナリズムと民主主義を巡る同時代の中国の経験として、五四運動についても現在新たな視角から議論が積み重ねられていますが、今号には水羽信男氏によるラナ・ミッターの近著の書評も掲載しました。五四運動から文化大革命を展望する視点は、大正デモクラシーからファシズムを展望する視点と重なり合うものがあることが示唆されており、互いの歴史経験の深みに根差して、相互理解の糸口を見出すことができるのではないかと考えます。

(丸田孝志)